人形浄瑠璃の魅力

もの言わぬ人形、人より繊細に雄弁に

主遣いがふうわりと人形を掲げる。左遣い、足遣いが両脇に位置を取る。主遣いが居住まい正し、人形の頭をもたげ、立ち姿に性根を入れたその瞬間、人形に命が宿る。三人の遣い手に人形が宿る。

しゃんと立った人形は、そこに地面があるかのように歩き出す。地面の決めの大切さ。歩く、立つ、座る。何キロもある人形を支え、頭と右手を操る主遣い。差金と呼ばれる細い棒を使い、主遣い、足遣いの動きを気遣いながら、左手を操る左遣い。足遣いは主遣いの動きにあわせ、人形の重心へと足を運ぶ。立役の決めの場面では自分の足を踏み鳴らし、足拍子で力強さを表現する。女役の人形では、自らの手の関節や着物の裾さばきで、あたかも足があるかのように見せる。世界に比類ない三人遣いの技法で演じられる人形浄瑠璃。互いの目線や間合いを常に感じ取りながら、一体の人形を繰る。

口や眼、眉や指、細部の動きの面白さ。五本の指がすべて関節まで動く「つかみ手」は時代物の立役の手。親指以外の四本がつながる「かきつばた」、指がやや内側に弧を描き固定された「かせ手」、女形の「もみじ手」「琴手」「三味線手」・・・様々な手が表情豊かに使い分けられる。琴を爪弾く指先に想いがにじみ出る。口元に添えて笑うその手に思いを隠す。手の動き一つで人形は生きもし、死にもする。

人形の肌の色や目は、その役回りを観客に知らせる。角目は立役、丸目は敵役。白は善人、赤や卵は訳あり。眉が動く「アオチ眉」や目を閉じる「ネムリ目」、目玉が左右に動く「寄り目」。下あごをスライドさせて、異形の顔をつくるのが「ガブ」。そして衣装の早変わりの妙。人形でなければできない動きにわくわくする。

人形遣いは人形に託して自分を表現するのだという。その喜怒哀楽はデフォルメされ、約束事の中でひとつの様式美となる。ことさら大振にダイナミックに、あるいは端折ってシンプルに。現代人にはない所作がかえってリアルを生み出す。主遣いが立ち姿を決める。左遣い、足遣いが寄り添い、もの言わぬ人形に血が通い、情がほとばしる。自ら動けぬ人形が、人よりも繊細に雄弁に、人の世を語る。憎み、愛し、涙し、惑い、悩み、喜ぶ、その不思議の世界に人々は魅せられ続ける。

絵本太功記（勝浦座）

傾城阿波の鳴門（勝浦座・徳島県）

武智光秀（勝浦座）